

## ジャック！ サンプル

誰もいない円形のステージ。しかしそれを取り囲む客席には六万人、そして建物の外には数百人ものファンが、コンサートの始まりを今か今かと待ちわびていた。柳がサングラスを持ち上げて時計を見ると、開演まではあと五分。最後に腕時計で確認したときからまだ一分しか経っていない。先週買ったばかりだというのにもう壊れたのか。舌打ちをしたとき、床下から殴られたような振動と低音が響いた。続く爆音。若い女性たちの悲鳴のような歓声が沸き起こり、スポットライトが絞られる。

しかしステージにはまだ誰も出てこない。腕時計をちらちら見ながら焦れたい気持ちを抑えることまた五分——ジェリーフィッシュのメンバーは緞帳が上がりきる直前、大きくジャンプをして飛び出てきた。

観客として見るよりもそちら側に立つことの多い柳もまた、全身の血が湧き上がるのを感じていた。サングラスを外し、マイクを握る青年を見つめる。以前会ったときは黒かった髪が、今は茶色く染まっている。悪くはないが、黒い方が似合う。それに大きすぎるTシャツはセクシーな鎖骨どころか肩まで見せてしまいそうだ。彼はそんな安い青年ではない。スタイリストを代えた方がいい。そんな思いもまた、彼の声が聞こえてきた瞬間に消え失せた。自宅で、移動中の車内で、待ち時間で、飽きるほどに聞いた曲が今、生であるが故に生じるわずかな違いを持つて聞こえてくる。

この日、ボーカルのミズキがステージに登場しただけで五人が失神。アンコールが終わるまでに二十人のファンが極度の興奮による体調不良で退場を余儀なくされたという。

しかしこのステージから二か月後、ドラマ、ニュース、バラエティー番組……国民がもつともテレビの前にいる夕食の時間帯、画面の上部には速報が流れ、翌朝の新聞全社の一面には黄色と赤の大きな文字が並んだ。

「大人気バンド・ジェリーフィッシュ、ボーカルミズキの体調不良により解散！」  
そうして大人気バンド、ジェリーフィッシュはファンの前から姿を消した。

\* \* \*

「はじめまして。西条と申します。海月さんですね」

西条の確認に、青白い顔をした小柄な青年は小さな声で「はい」と答えた。

八畳の小さな部屋。黒い革張りのソファに座り、背の低いガラステーブルを挟んで相対する。

五月といえども、最近の春は夏とほとんど変わらない。しかし、暑かっただろうと用意した氷入りの麦茶に、海月は視線を向けもしなかった。

「ご希望では徹底的に、ということですが、具体的にはどの辺りまで望めますか」書類を差し出すと海月はそれを一瞥し、だるそうな様子で手に取った。その様子に、まるで見えない手枷がついているようだな、と西条は思った。

スパンキング・鞭・玉責め

アナル開発・尿道責め・ろうそく

強制連続絶頂・潮吹き調教ピアッシング

人体改造・去勢・性器改造……

海月の目はまるで何も映していないかのようにどんよりと濁り、力を失っている。それでも文字を追いかけるとぎよろりと動いた。

この青年のことは、芸能に疎い西条でも知っていた。大人気バンド、ジェリーフイッシュのボーカルだ。しかし半年前、人気絶頂のさなか突然の解散発表。理由はボーカルミズキの体調不良だと報道されていたと記憶している。

確かに目の前の体は、テレビで見っていたよりもかなり痩せているように見える。頬もこけ、ニユースで流れたライブ会場で走り回るエネルギーギッシュな様子は微塵も見られない。しかしバンドを解散する——しかも活動休止でもない——ほどの体調不良と言うならば、こんなところにやってくるのはいささかおかしい。

というのもここが本格SM店だからだ。

「去勢……」

海月の口からこぼれ落ちたそれは、エアコンの音でもかき消されてしまいそうなほどの音量だった。本当にバンドのボーカルを勤めていたのだろうかと疑問に思うほどの。しかし耳を澄ませていた西条にはきちんと届いた。深く頷き、海月を見つめる。

「かしこまりました。それでは心身の調教を終えてからオペの予約をいたします。ただ去勢にも種類がございます、その名のとおり性欲を失わせるための睾丸の切除、もしくはは——」

「性欲は……残してください」

この部屋に案内して十五分。海月が発した中で一番長い言葉だった。もちろん、驚きも同情も表情には出さない。

「では陰茎の切除のみということでしょうか。一生……ひどく苦しい思いをすることになりますか」

「はい」

おそらく海月が欲しているのは快樂ではない。人生を、現実を、世の中を、過去を……自分の存在までもすべて忘れてしまえるような苦しみだ。

この職について十年になる西条には手に取るようにそれがわかった。本心からSMを好み、苦痛は快樂であると感じる人間は一目見ればすぐにわかる。相対するだけで目をキラキラと輝かせ、これから訪れるめくるめくる官能の世界に期待してそわそわし始めるからだ。

しかし彼は――。

並大抵な気持ちでは海月を癒すことはできないだろう。

客がただの苦痛を希望したとしても、それは本人がそれ以外の解決方法を知らないだけという場合が多い。おそらく海月はそのタイプだ。人生に絶望し、かといって自ら命を絶つこともできず、可能な限りそれに近い状況にしてもらえるのを待っている。

(やはり心を落ち着かせるところから始める方がいいか……)

西条は頭の中でスケジュールを組み立てた。

「ご契約期間は一年。その間に去勢手術後の体調回復まで予定しております」

言いながら、西条は海月の様子を観察した。生々しい話を始めると人によつては現実を意識するものだ。しかし海月の様子は変わらなかった。気持ちは揺らがないらしい……もしくはそこまでの思考力もないらしいと判断し、話すスピードを落とす。

「オペの予約は一度入れるとキャンセルすることができなくなりますが――」

再び言葉を止め、海月が小さく頷くのを確認した。腰を上げ、海月の右隣に体を移す。

「改めまして、海月さんの担当をさせて頂きます、西条と申します。痛みと苦痛と快感と……我を忘れてしまうような時間にお連れいたします」

海月は微動だにしなかった。ぼうつと、しかしどこか思いつめた様子で一点を見つめている。

「こちらへは毎日通つていただきます。急用が入った、体調が優れない、というようなことがあればご連絡をお願いいたします」

きっと海月は欠かすことなく来るだろう。だってここは……これから海月が唯一心を許せる場所になるのだから。

\* \* \*

我ながら危ういなと……そう考える気力が残っていたことに、海月は内心で驚いていた。先日、本来は数回繰り返すという面談を、海月はこの一回のみでかまわないうと切り上げた。プレイを望むのなら相性は大事なのだろうが、海月がここに来るのはそんなもののためではないからだ。

西条と名乗った男はとても調教師とは思えないほど穏やかな話し方をする人だった。本当にこの人に任せてしまつて、ひどくしてもらえるのだろうか——。しかしここに申し込んだとき、支配人だと名乗った中年の男は彼が一番のお勧めですといつて紹介してきたのだ。

西条の第一印象は「モデルみたい」だった。ほっそりとした頬、左耳にだけ見えるピアス、フレームレスの知的なメガネ。髪の毛は、それを留めるヘアゴムを外せば肩より下まであるだろう。服装はスーツ。しかしサラリーマンが着るようなそれではない。一見執事のようなスーツ——S役だから革製の際どいやつを着ているものとはかり思っていた——は人を選びそうなのに、まるで生まれたときから着ていましたと言えそうなほどに着こなしていた。一方で、時計や指輪の類い《たぐい》はしていなかった。一度ポケットから懐中時計を取り出したのが見えたので、おそらくプレイの邪魔にならないよう外しているのだろうと推測していた。

「こんにちは。お待ちしております。こちらへどうぞ」

西条は、指定の時間にエントランスまで迎えに来てくれていた。あとに続いて茜色の絨毯が敷き詰められた廊下を進み、止まっていたエレベーターに乗り込んで十階で降りる。

しんと静まり返ったフロア。そこにはクリーム色の壁紙に囲まれた廊下がただ一直線にあるだけだった。それにしても長い。二十メートルはあるだろう。だからこそ、その飾り気の一つもないところが異様に見えた。

エレベーターを降りてすぐの右手側にはドアが一つあった。しかしこちらにも、プレートや飾りは何もない。中に人がいる気配もなく、この店は人気がないのだろうかと一瞬不安になったけれど、すぐにそんなことは関係ないと思直した。この体と心を壊してさえもらえれば、あとのことはどうでもいいのだ。

「こちらです」

どうやら広いフロアに部屋は二つしかないらしい。廊下の一番奥まで来たけれど、ドアがあったのはエレベーターのすぐ右手と、もう一つは廊下の左側、今海月の正面にあるものだけだった。

「どうぞ」

「すみません……わ、」

開かれたドアをくぐる。

広がっていたのは、二十畳はあるきれいなリビング。正面には大きな一枚ガラスでできた窓があり、自然と足がそちらに進んだ。遠くに高層ビルが立ち並んでいる。しかし近くに建物はなく、覗かれる心配はなさそうだ。

「お気に召していただけましたか」

背後から聞こえた声に驚き、体が揺れた。慌てて数歩下がって窓から離れる。

「夜になるとまた違った景色がご覧いただけます。まあ——」

西条が言葉を切った。間を置いて、海月の注意を引き付けようとする。「その頃に

はもう外の景色を見ている余裕なんてないかもしれません」

西条が窓に触れた。嵌め殺しなのは事故防止のためだろう。でももしここにペランダがあつたら、きつと想像もつかないようなプレイが可能になつただろうに……ともつたいないような気になつた。

「室内をご案内いたします」

リビングにはソファやテーブル、キッチンまであつた。清潔感もあつて、まるで高級マンションのようだ。誰かが住むわけでもないだろうに——それとも宿泊コースもあつたんだつたか。ここに申し込んだときはあまりにも頭がぼうつとしていて、細かいことは覚えていなかった。

リビングの左奥にあるドアの先はベッドルームだつた。部屋の左手側には大きなベッドがドンと置かれている。身長百七十センチの海月が縦に寝ても横に寝ても、ゴロゴロと転がることができそうなキングサイズ。

「シーツの下には防水シートが入っています。無意識に濡らしてしまうことが多くなるでしょうが、その辺りのことは気になさらなくて結構です」

海月は返事をしなかったが、西条はそこからしつつけようとは考えていないようだつた。他には特に説明はないようで、リビングの反対側にあるドアを開けた。しかしその右手にも、ドアがある。

「もう一つのドアは浴室とトイレです。そしてこちらはプレイルーム。一番過ごす時間の長い部屋ですから、配置などご希望がございましたらご遠慮なくお知らせください」

入ってすぐ目についたのは婦人科にあるような大型の検診台だつた。普通と違うのは、手足の部分に拘束のためのベルトがついているところだろう。誰も座っていないのにすでに大きく開かれた足置きの間には、優雅に座れる背もたれ付きの椅子が置かれている。

その奥の壁際にはX字の礫台が設置されていた。こちら両手足首に当たる部分には黒い手錠が下がっていて、その光沢はまるで獲物を待っている猛獣のよう。

さらにその左側には三角木馬。その横にあるキャビネットには——きつと、足にくくりつける錘が入っているのだろう。遠目にも、その凶暴さが見て取れる。

他にもブランコのようなものや、穴の開いたベンチのようなものも置かれていた。どれもすべて拘束具付き。Mの自由を奪い、Sが体を自由にすることを補助する仕器の数々。ふと壁際の棚に視線を向けると、ガラス棚の部分にろうそくらしきものが見えた。SMグッズの通販や個人サイトで見ただけの非現実的だつたはずのものが、生々しく揃っている。

「こちらの部屋についてご質問やご希望はございますか」

「いえ、ありません」

西条の視線が陰部に注がれたことに海月は気が付いた。本格的なSM部屋。それを見て興奮しているかを確認したのだろう。

「——恐怖心はございますか？」

小さく首を振る。そんなものはない。そんな感情は……そんな感情を、もう味わいたくないからここに逃げてきたのだ。そして、罰を受けたかったから。自ら望む罰など、ただの自己満足だとはわかっているけれど——。

~~~~~

翌朝、海月はいつものどおりの時間にマンションを出た。タクシーの中でも感じるひどい湿気。しかし雨は降り始めておらず、落ちてきそうな重い雲の下を歩いた。

「濡れては——」

「降ってませんでした」

「……そうですか。ではベッドに入りましょう」

ここに通うようになって二週間以上。その時間を無駄だったとは思わないけれど、それでもやっぱり早くプレイに入ってほしかった。

引かれた手を振りほどくようにしてその場に残る。西条はそんな海月の行動に驚くこともなく、ただじっと海月を見つめていた。

「……もういいですから」

海月が突き放すように言っても、西条はまだ口を開かない。かといって海月の言葉の意味がわからないというふうでもない。

「もうプレイをしてください。じゃないと僕はもう……」

落ち着かないのだ。早くこの世界から消えてしまいたいのに。これ以上正気を保ってなんかいたくないのに。なのに、壊されるどころかぬくもりを与えられ、食べ物を与えられ、健康に戻されようとしてしまっている。

「——わかりました。ではプレイルームに行きましょう」

淀みない足取りで西条がドアを開けた。あまりにもきつぱりとしたその切り替えに気持ち揺らぎ始める。

(これで本当に……)

いや、怖気付く必要なんてない。この店に申し込むまで、一か月悩んだ。それでもここを頼ることに決めたのだ。

(最初からプレイに入ってくれていれば……)

手を繋いだり抱っこされたり抱きしめられたり……その時間さえなければ何も考えず、ただ壊れていくことができたはずだったのに。

「海月さん」

名前を呼ばれはつとした。足早に中に入るとドアが閉められ、ガチャリと大きな音を立てて鍵がかけられた。

「服を脱いでください」

脱がせてもらえろと思っていたわけではない。しかし冷静な目でじっと見つめら

れると、どうしたらいいかわからなくなった。

「海月さん？」

「……はい」

返事をする、西条は長い足を組んでゆったりとソファに座った。

脱ぐべきものはTシャツと、ズボンと、下着だけだ。時計やアクセサリ、ベルトはしていない。なのに、そのたった三枚を脱ぐのに、体感で五分以上かかったような気がした。

「……白いですね」

西条が言うまでさらに十分以上があった。裸で立った状態をじつと観察され、むず痒さを覚える。今まで雑誌やDVDの撮影で監督やスタッフにはたくさん見られていたというのに、それらとはまったく違う感覚。服を着ているかどうかの違いからだろうか……。

「あ……は……っ……」

「どうしました？」

わかっているくせに。

これまでは、裸なんて見られても何ともないと思っていた。いやたぶんこの二週間さえなければ、今日が初日だったら何も思わなかったはずだ。なのに今は勃起こそしていないものの、心の中をかき乱されている。

「——何でもありません」

そういえば、いつの間にか自然に声が出せるようになっていたなと気付く。それだけの体力も戻ってきた。それを善しとは思わなければ。

「ではそのまま後ろを向いて」

返事をしなくても西条が怒ることはない。でもその理由が客と店員という立場からのものだとしたら少し寂しい。それでもなんとなくこの心境の変化に気付かれなくて、心が落ちたままのふりをしながらのっそりと背中を西条に向けた。

どこを見られているのかわからず背中がムズムズする。役者さんは背後のヌードくらい、ドラマや映画でさらすこともあるというのに。

「壁に手をつけて。上体を落として、お尻を突き出してください。足は肩幅に開いて」

拒否することなどできなかった。それでも羞恥心は消えず、おずおずと足を開き、ゆっくりと頭を下げる。

「それでは見えません。もつと思いきりお尻を突き出してください」

見えないということは、局部を見ようとしているということだろうか。海月自身も見たいことのないようなところを。

背中を反らせるようにしてお尻を突き出すと、バランスが悪くなってさらに足を広げざるを得なくなった。

「ああ、よく見えますよ。そのまま動かずに」

振り向かなくても、アナルや陰囊の辺りを見られているとわかった。熱いほどの視線でそこを射抜かれている。

しかしすぐ、太ももが痛くなってきた。体勢を維持し続けるのがつらい。

「動かないでください」

ぴしゃりと言われ、体にグツと力が入った。けれど太ももが疲労を訴え震え出す。

「つく、」

「限界ですか」

「っ、いえ……」

本当はもう座りたかった。もしそこを見たいというのなら四つん這いでもいいだろうと。しかし西条は別に海月のそこを見たがっているわけではないとわかっていて。屈辱的な体勢を取らせることで、心から服従させようとしているのだ。

(あ……うそ……)

一年近く前から反応しなくなっていたペニスがゆつくりと熱を持ち始めるのを感じた。ずっと不能のままでもいいと思っていたので困惑する。

「体を起こしてこちらを向きなさい」

敬語に時折混じる命令口調。その使い分けがどのようななされているのかはまだわからないけれど、どちらの声も厳しくてゾクゾクする。

背筋を伸ばすと、太ももに血が巡るような感覚があった。腰の痛みも軽減する。しかしほっとしてはいられない。

ゆつくり、体の向きを変えた。鋭い視線が勃起を貫く。

「ペニスが反応していますね」

「っ……はい……」

「アナルを見せつけて興奮したんですか」

何と答えたらいいのかわからず視線をさまよわせていると、こちらを見なさいと叱られた。

「すみません」

まるで学校の先生に怒られた気分。そんな常識もないのか、と思われたのではないかと恥ずかしくなる。

「そう。私が話しかけたとき、問いかけたときは目隠しをされていない限り必ず私の目を見なさい。もちろんさつきのようにいやらしいところを見せつけているときは振り返ってまで見なくてかまいませんが」

叱られているとわかっているのに言葉の端々に含まれる淫らなそれが目の奥に熱いものを注いでいく。

「返事は」

初めて返事を求められた。西条の中でもプレイが始まったということか。

「はい」

「私の問いへの答えは」

「っ……わ、わかりません……」

わからない。自分がどうしてはしたなくペニスを勃起させたのか。だってこんなこと、経験がない。

「わからないんですか」

「わかりません……」

しかしそう答えていながら、西条に詰められるとさらにペニスが硬くなっていくのを自覚していた。

「ではまず海月さんがどれほどいやらしい人であるかをわからせてあげないといけませんね。自分がどのようなことで興奮する変態か、理解するところから始めましょう」

西条のプレイは海月が入会申し込みをするときに想像していたものとはまったく違っていた。あの頃はただ拘束された体を鞭や棒で叩かれ、ペニスの先に熱いうそくを垂らされ痛みに泣き叫び、しかしそれでもやめてもらえず気を失うようにして眠りにつくものだと思っていた。なのに、まさかこんなねっとり絡み付くような調教をされるなんて。

「こちらに来なさい」

ペニスはもう、完全に勃起していた。一步進むごとにそれが上下にぶるんぶるんと揺れている。

「海月さんがここへ来るのは快感を与えられ、本能のまま気持ちよく精液を吐き出すためですか」

「……違います」自然と、囁みしめるような声になった。

「では何のために？」

「体を痛めつけてもらうためです」

「痛みがないとペニスを勃起させてしまうんですか」

「いえ……」

自分でもよくわからなかった。そもそもセックスも、SMの経験もないのだ。それでも自分がMであるという自覚はあったし、気が狂いそうなほどの苦痛を与えられれば現実から目を背けていられると根拠もなく思っていた。だからこんなふうに自分の体と向き合ったことなんて一度もない。

「ではどうして勃起しているのかもわかっていない、ということですか」

「はい……」

拳をぎゅっと握り、目を閉じた。しかしその瞬間、腰に鋭い痛みを感じた。

「痛っ……」

目を開けると、いつの間にか西条は黒い鞭を手にしていた。長さが一メートルにも満たない一本鞭は、狙ったものは決して外さないと誓っているように見える。

「私はさっき何と言いましたか」

「あ……め、目を見なさいと……」

それで叩かれたのか。

「わかってるのにそんな簡単なこともできないんですね」

蛇が体に巻きつくような、絡みつくような視線だった。

「すみません」

「簡単に言えてしまう謝罪の言葉なんていりません。膝をつきなさい」

「はい……」

立ち膝になると、「四つん這い」と短く言われた。きつと今から鞭で叩かれるのだ。どこを叩かれるのか……背中だろうか。それともお尻か。さすがに頭はないだろうと思いつつも経験がなく、恐怖心が膨らんでいく。それでも手と膝で体を支え、閉じないように目を見開く。

「あっ」

突然、無機質なものがペニスの先端に触れた。下からそこを覗き込むように見ると、鞭の持ち手部分でくいくいとペニスの先を押されている。

「今から何をされるかわかっていますか」

「鞭で叩かれます」

「初心者であることを考慮しても、その言い方は許容しかねます。それでは私が一方的に叩いているみたいでしょう」

「……鞭で……叩いていただきます」

はつきり答えたつもりだったけれど、西条はいいとも悪いとも言わなかった。それがまた恐怖心を膨らませる。心臓がうるさいくらいに鳴っている。

「さ、西条さん……？」

「まだしつけないでくださいね。こういうときは『お仕置きをしていただく』という言い方をしなさい」

「はい」

「ではもう一度。今から何をされるかわかっていますか」

「はい……西条さんにお仕置きしていただきます」

「どうしてお仕置きをされるんですか」

「勃起させたからです」

待っていても、西条からの返事がない。間違えたのかと冷や汗をかく。

「——どこを？」

冷たい声。あまりいい反応ではないとわかったけれど、返事をしなければもっと怖い方に進んでいく。

ここへは体を痛めつけてもらうために来ている。今もそう思っているし、そうしてほしいと思っているけれど、それでもこうしていざ体験すると勝手に恐怖心が膨れ上がった。

「ペ、ペニス、です……」

「そんなきれいな言い方はしなくてよろしい。もつとはしたくない単語を使いなさい」

西条の言うものがどういうものかわからなかった。とりあえず、子どもっぽい言い方してみる。

「ちんぽ、です……」

一言一言発することが怖かった。さつきみたいに突然鞭で叩かれるかもしれない。背後の空気が揺れる度に、鞭を振りかぶっているのではないかと体が勝手にビクビクと跳ねる。

「いいでしょう。これからはそうやってはしたない言葉を使いなさい」

「はい」

「ただ——」

地を這うような声色にスツと体から血の気が引いた。

「お仕置きの理由を間違えています。私の許可なく勝手に勃起させたことはお仕置きの対象ではありませんが、今からのお仕置きはそれが理由ではなかったはずですよ。そうだったろうか。ペニスの勃起にばかり気を取られ、どんな話の流れだったのか忘れてしまった。

「……すみません……わかりません」

ため息の音が聞こえ、恐怖心と緊張感で胸が爆発しそうになる。

「——目を閉じたから」

「あ……」

「今回は初日なので間違えたことは許しますが、理由を理解していなければそれは何のお仕置きにもなりません。今後は気を付けるように」

「すみません……」

「謝る必要はありません。そんな言葉に意味はない、と先ほども申し上げました」

「は、はいっ」

怖かった。だってこの二週間、ずっと優しくかったのに。喋らなくてもそのぬくもりから優しさが伝わってきていたのに。でも、そんな西条を求めたのは海月だった。「動く」と陰囊が潰れます。ここをダメにするのはまだ先なので、動かないようにしっかりと体を支えていなさい」

「はい……」

怖い怖い怖い。今からどんな痛みを与えられるのだろう。尻叩きとは違い、鞭なんていくら振っても西条自身には何のダメージもない。だからいくらでも——たとえば海月がどうなるうとも続けてしまうことができる。

「ヒイツ……」

想像しただけで喉から変な音が出た。だって、沈黙が長すぎた。もう始まってもいいだろうに、いつまで経っても鞭を振りかぶる気配がない。いつ始まるか、いつ痛みが襲ってくるかわからない故の恐怖心。それを求めて、ここに来たはずなのに——。

「っー！」

突然お尻に何か触れた。それだけで勝手に痛みだと判断し、体が防御の姿勢をとった。下半身を床につけるようにして逃げてしまっていた。

「……海月さん」

地を這うような声。やってしまった、と今頃気付いてももう遅い。

「動かないようにと言ったはずです」

「す、すみません……」

どうしても、「怖くて」とは言えなかった。まさか撫でられただけで逃げてしまうなんて。けれどきつと西条自身もそのことは予測していたはずだ。だからこそじつくりと時間をおいて恐怖心を増幅させ、そうしておきながら撫でるだけに留めたのだ。

「この調子では簡単に陰囊が潰れてしまいますよ」

「すみません……」

謝罪の言葉はいらないと何度も言われたけれど、他に返事の仕方が思い浮かばなかった。

「これまでに痛みを与えられた経験は？」

「あ……」

返事に迷った。痛みを与えられた経験——頭に浮かんだ母親の顔。しかしすぐ、いや、あれはしつげだったのだ、と思い直す。

「ありません」

「では先に激しい痛みを覚えなさい。そうすれば、それに満たない痛みならば冷静に向き合うことができるようになりますから」

恐怖に気が狂いそうだった。でもそれこそまさに求めていたもの。自分の手ではできないことを他人にやらうことで心と体を壊す……そうすれば楽な世界に飛べるから。

「こちらへ」

「あ……」

なぜか手を引く西条の手は優しくかった。腕を掴まれるのではなく、きちんと手を握られたのだ。しかし連れて行かれた先は、腰の高さのテーブルの前。

（ここに上体をのせろってことかな……）

そうすれば、背後から叩かれても反射的に前へ逃げることはできなくなる。視線を動かすと、テーブルの端にベルトが垂れているのを確認した。やはり使い方は想像のとおりだろう。上体をのせた状態でお尻の辺りにそのベルトを留めてしまえば、身動きすることはできなくなる。

しかし西条が命じたのはまったく別の言葉だった。

「ペニスをのせなさい」

「え……？」

「二度は言いません。早くしなさい」

ペニスをのせる——しかし海月のペニスはまだ硬く勃起したままだ。上を向いてしまっていては、のせることはできない。

(萎えさせるってこと……?)

しかしどうしたらいいのだろう。普通ならすぐに萎えるであろうこの恐怖心をもつてしても、ペニスは一向に萎える気配がない。

「……すみません。ち、ちんぽが勃起しているのせられません……どうしたらいいですか」

そんなこともわからないのかと叱られるかと思った。しかし声を荒げられることも叩かれることもなく、思いのほか穏やかなトーンで言われた。

「テーブルの天板に貼り付けるように、自分の手で押さえつけなさい」

「はい」

怖い。きっとペニスを鞭で叩かれるのだ。その準備を自分でしないとイケないなんて。

与えられる痛みを想像するだけで手が震えた。それでもまだ萎えないことに内心驚きながら、亀頭部分を天板に押し付ける。

「そのまま動かないように」

「は、い……」

西条が持っていた鞭をテーブルに置いた。想像どおりお尻の辺りでベルトが留められ、体を引くことができなくなる。それから西条はテーブルの端からまた別の、腰のものより細いゴム製のベルトをひっぱりだした。

「それは……」

「手をどかして」

海月がペニスから手を離すと、西条の持っていたベルトが亀頭をテーブルに押さえつけるようにして固定した。これで体とペニスは直角になる。

「手を背中に回して」

「……はい」

着々と拘束が進んでいく。背後に回した両手には手錠がかけられ、腰のベルトと接続された。けれどどのベルトも肌に触れる部分は柔らかい。これなら多少身じろぎしても、こすれて怪我をするようなことはないだろう。

「まずは五回。自分で声に出してカウントしなさい」

「は、はい……」

「カウントは『あと何回僕のちんぽを叩いてください』という言い方をするように」

「はいっ……」

怖いのに興奮した。だってペニスを叩かれるのだ。しかもそれをおねだりの形で数えるなんて。

「始めなさい」

「はい。僕の……」

言わなきゃいけないとわかっているのに、うまく声が出てこない。ペニスの先端からカウパーが漏れ、テーブルを濡らしている。怖いのに、この恐怖心は紛れもなく本物なのに、興奮している。

「ぼく、の……」

どうしても声が出ない。西条はもう呆れているだろうか。怖くて表情を窺うことはできないけれど、隣で何も言わずにじっとカウントが始まるのを待っている。

「はあ、ん……ぼく、の……僕のちんぽ、を、あと五回、叩いてくださいっ！」  
ペシン！

「っ……アアア！」

あまりの痛みに、悲鳴は遅れてやってきた。

~~~~~

西条が三角木馬に触れた。ゆっくりと踏み台がせり出してくる。すがるような気持ちで足を乗せた。足に力を入れてふんばると、股間がわずかに楽になった。

「ひとまずこのお仕置きはこれで終わります」

待ち望んでいた言葉。安堵から涙が落ちた。

「さあ、降りましょう」

拘束が解かれ、体を支えて下ろされた。ベッドに座ると、背後に海月を抱きかかえるようにして西条が座った。

「次は痛みを快感に変える練習です。いつかペニスを叩かれて射精できるようになりますよね」

「っ……っ！」

西条がジンジンと痛み続けるペニスを握った。真っ赤に腫れたそれは、触らずとも熱を持っていることがわかる。なのに西条に握られただけでそれは簡単に姿を変えた。

「あ……」

「優秀ですね。ほらしごきますよ。他人の手で刺激されるのは初めてですね？」

「は、はい……」

痛いのに、初めて他人から与えられる快感に体が痺れる。

「あ、あ、や、いや……」

こんな状態なのに感じてしまうなんて。

西条の手で作られた筒は、ペニスを撫でるようにしごいていく。皮は剥かれなかった。包茎状態のまま、皮をオナホールのようにしてカリ首をこすられる。

「っあ、んっ、アッ」

「鞭で叩かれたばかりなのによく勃起ができますね」

「うう……やあっ、あ、んっ、はあっ」

「ペニスを握られて気持ちいいですか」

「はいっ、ちんぽっ！ 気持ちっ」

「痛みはないんですか」

痛みはあるけれど、それ以上に……いやその痛みも含めて快感だった。

「痛いけどっ痛いけど気持ちいいですっ」

「この様子だとすぐに痛みで射精できるようになりそうですね」

「アアッ！」

これは褒められているのだろうか。でも今はとにかく射精がしたい。しかしきつと握る手に力を入れられたら痛みで萎えてしまうだろう。かといってこの強さでは射精までたどり着ける気がしない。

「ああっ、やあっ」

「普段はどのようにオナニーを？」

「手、でっ」

「それだけですか」

明らかに疑いを含んだ声だった。手の動きが止まり、快感に変わっていたはずの痛みがぶり返す。

「どうして……ですか」

質問に質問で返すなど叱られるかもしれないと思った。しかし西条は「淫乱だからですよ」とさらりと言った。

淫乱だなんて。でも男なんてみんな気持ちいいことが好きだろう。

「答えてください。オナニーは手を使うだけですか」

「手と……枕とか布団とか……」

「どのように使うんですか」

会話はまだ続くのだろうか。早く手の動きを再開してほしいのに。握ってもらわないと痛みばかり感じてしまう。

「手は……普通に握って……。枕とか布団は、足に挟んで腰を振ります」

ペニスは刺激されていないのに、自分の発言でドクンと震えた。

「腰を振る？ こんなはしたくないものを他人の中に入れるときのようこすり付けるんですか」

「あっ」

ペニスを馬鹿にするようなそのセリフに、興奮が一気に高められた。そうだ、こんなはしたくないものをセックスで使うときのように腰を振ってこすり付けるなんて、なんておこがましいことをしていたのだろう。

「ごめんなさい……」

西条が息を呑んだような気配がした。しかし空気はすぐに緩やかになり、手の動きも再開される。

「んっ」

「もうオナニーはしませんね？」

「え……」

「どうせ切り落とすんですから必要ないでしょう」

「あ……」

そうだ。今西条の手の中にあるものは近々この体から切り離されるものだ。不要なもの。どうせ子どもを成すこともないし、人様に入れさせてもらえるようなものではない。それに元々誰かに入れたいなんて思ったこともない。

「はい……。知らないものです」

言葉にしたら、それは想像以上に重く胸にのしかかった。頭では何度もペニスを失うことを想像していたけれど、今のこれは想像なんかではない。時が来れば西条は本当に病院に連絡をして海月のペニスを切り落とすための手続きを取る。その手術費用だつてすでにこの利用料とともに引き落とされている。

「自覚があつて何よりです。さつさとペニスの皮を切り取つて敏感な亀頭をむき出しにしてみましようね」

~~~~~

歩く度、鞭で打たれたペニスが痛む。けど心は爽快で、ただの街並みも輝いて見える。鼻から息を吸うと、金木犀の甘い香りが胸を満たした。いつの間にか街路樹の根元には鮮やかなピンク色のコスモスが咲いており、季節の移り変わりを感じさせた。これまでずっと植物から季節を感じるなんてことはなかった。

まだ家で一人しているとバンドのことを思い出し気が狂いそうになることはあるけれど、今から西条の所へ行くと思うとこんなにも心は穏やかだ。時間や風もゆつたりと流れているように感じる。

（出て来てよかった……）

これまで、お店の往復はタクシーだった。けれど今は歩きたい、体を動かしたいと思えるほどに心が軽い。

（今日も叩いてほしいな……）

これまで使われていたのはずっと一本鞭だった。けれど昨日のお仕置きでは初めて、先端にチップが付いた乗馬鞭が使われた。これは一本鞭とは比較にならないほど衝撃が強くて、体を拘束されていなければ鞭を振り上げられた瞬間にうずくまり、背中にその衝撃を受けてしまつていただろうと思うほどだった。

（普通はちんぽより背中の方がいいって思うものだけど……でも背中よりちんぽがいい……）

いつの間にか、普段から男性器をちんぽと呼ぶようになっていた。最初は恥ずかしくて、でも蔑まれていたみたいで興奮して……けれど今はもう自分の性器はちんぽと呼ばれるにふさわしいものだと思得している。そして——同時に失いたくない

と思うようになっていた。いつまでも鞭で叩き、時に三角木馬で押し潰して痛みと恐怖を与え、その激痛が残るところを優しく撫でて揉み、痛みは快感なのだと体に教え込ませながら射精させてほしい。

(っ、痛たた……)

いやらしいことを考えると、皮膚のひきつりと、少し前に取り付けられた貞操帯がその勃起を戒める。でもこの痛みがあると安心する。その理由は、自分でもまだよくわからないけれど――。

ファストフード店の前を通り過ぎ、お店のエントランスがある路地裏に入る。すると向かいから背の高い男性が歩いてきた。手には携帯。どうやらメールか何かの返信をしているらしい。下を向いているので顔は見えないけれど、どこか見覚えがあるような気がする。もしかしたら業界関係者かもしれない。いや、しかしこの路地の奥にはあの店しかない。仕事の知り合いだったらどうしようと思いつつ、それでもどうしても気になり失礼にならないようにさり気ない様子でそちらを見てみると、あちらも海月の存在に気が付いたようだった。

「――あれ？ 君は」

上げられた顔。メガネをかけているけれど、その精悍さは隠せない。それに何より、子どものときから毎日のように聞いていたその声は間違えようがなかった。

「柳さん……」

男は今年活動二十五周年を迎える人気バンド、ホワイトムーンのギターボーカルだった。子どもの頃からの大ファンで、海月が音楽に興味を持つようになったきっかけの人。とにかく柳がかっこよくて、柳のようになりたいくてギターを覚えた。初めて共演したときに楽屋挨拶で握手してもらったことも昨日のことのように覚えていた。その節くれだった大人の手にドキドキしたことも、「ミズキくん」と呼んでくれたときの唇の動きも。

「ミズキくんだよな？ ジェリーフィッシュの」

「あ……は、はい……」

最後に会ったのはジェリーフィッシュの解散直前、音楽番組に出演したときだ。気まずい。

「こんなに痩せてしまつて……体調は大丈夫かい？」

優しい話し方。ライブ中は激しいのに、普段は穏やかで紳士的な人だった。そうやって比較できるくらい、柳の出ている番組も答えたインタビューもたくさん見てきた。だって本当にこの人のようになりたかったのだ。

「は、はい……」

必死に記憶を手繰り寄せる。身勝手な解散でこの人に迷惑はかけなかっただろうか。しかしあの頃のことを思い出そうとしても頭にモヤがかかったみたいでよく思い出すことができない。

「そうか。それならよかったよ。それに顔が見られてよかった」

「色々にご迷惑を——」

「迷惑なんてかかっていないさ」

柳の手にある携帯が電子音を奏でた。しかしそれはすぐに止まる。メールだろうか。

「すまないね、これから仕事なんだ」

「すみません」

「いや、声をかけたのは俺だから。またね」

「は、はい」

社交辞令の「またね」。それでも胸の鼓動が激しくなるくらいドキドキした。

「失礼します」

「うん、また」

背中を見送っていると、背後から聞き慣れた声に呼ばれた。

「海月くん、」

「西条さん」

「遅かったから何かあったのかと思って」

「あ……すみません。今ここで知り合いに会って……あー……知り合いつていうか」  
何と言えはいいのだろう。仕事の先輩……いや、そうやって一緒にくっついてしま  
うのも恐れ多い相手だ。結成から二十五年、デビュー当初から人気のあったホワイ  
トムーンは人々に飽きられることなく今も最前線を走り続けている。若い子にもフ  
アンは多く、その子らが彼らを知った理由のほとんどは「親がファンだから」。そう  
やって二世代、三世代を丸ごと魅了してしまう。

そんな彼に会えたことは嬉しかった、と思う。けれど以前のように素直に喜ぶこ  
とができないのは、迷惑をかけたという負い目があるからだ。それに身勝手な解散  
をしてしまったことへの羞恥心。柳は一度決めたことはやり通すというのを自分  
に課しているといろんな媒体で話していて、実際にストイックな生活をしているらし  
いの。初対面するとき、「柳さんに憧れて音楽を始めました」と言ってしまったこと  
が恥ずかしい。もう忘れられているといいけれど。

~~~~~

柳の心と体が満足したとき、サナは意識を失っていた。華奢な体をベッドに寝か  
せ、温かいタオルで体を拭く。ピアスホールの開いた乳首とペニスには真っ赤に腫れ  
上がり、まるでもつと弄ってほしいと訴えているかのように見えた。

薄い布団をかけてエアコンの温度を調整する。ヘッドボードに置かれたメモ帳に  
「ツアーが終わったら連絡する。今日もありがとう」と書き残し、財布から抜き取  
った数万円をその下に置いて外に出た。

来たときはまだ朝の空気を感じていたのに、今はもう夕方の切ない雰囲気を漂わ

せている。けれど大事なものはこれからだ。柳はエントランスを抜けると店前の路地裏でミズキの姿を待ち続けた。

「――あ」

「やあ、こんにちは」

今日も来るか、それともこないか。来るなら大通りからか店からか――ミズキが来る、という予想は的中した。しかし大通りからだろうというのは外れ、ミズキは柳の左手側、店のエントランスから現れた。

うつすらと上気した頬、気だるげな足取り、虚ろな目は性的な疲労感からくるものだろう。この華奢な体でどれほどの痛みを耐えたのか――いや、そういえばここはエイジプレイにも対応していたな、と思い出す。Sではないことは確かだが、Mか、もしくは赤ん坊なのか――。

「突然すまない。少し時間をもらえないだろうか」

脳内に浮かぶ邪念を隠すように明るい声を出す。

ミズキの動揺は目に見えてわかった。しかしここで引いてしまえば一生後悔する。

「少しでいいんだ」

「僕に、ですか」

「そうだよ。実は俺はずっと君を探していたんだ」

先にプレイをしておいてよかったと柳は心の底から自分の判断に感謝した。小さな体。くりつとした目。柔らかそうなふわふわの髪は、最後に見たときとは違って黒色に戻っている。まさに柳の好みのタイプ。しかし今はその話をしに来たわけではない。

「時間は取らせない。帰りも家か、近くまで送るから」

あまり必死さを出すと怯えさせてしまう。かといって丁寧にしすぎても年齢や立場の違いを気にして素直な気持ちを吐き出してもらえなくなってしまうだろう。

「――いや、やっぱりこのまま送るから、その間に話を聞いてくれたらいい」

「え、と……はい……」

エントランスから出てきたときの恍惚とした表情は今や不安に揺れていて、今すぐにも抱きしめてやりたくなった。そうさせているのが自分であることに悦びを覚えながら。

「おいで。地下の駐車場にとめてある」

ミズキを助手席に乗せ、柳は静かにアクセルを踏み込んだ。昨日は歩いていたようだから、自宅はそれほど遠くはないだろう。解散してもうすぐ一年が経つとはいえ、まだまだジェリーフィッシュの人氣は根強い。電車になんて乗れば大変な騒動になってしまう。となるとあまり時間はない。訊いてみると、やはりそれほど遠くではないようだった。しかし歩くには少し遠い、と思うのは四十を過ぎた自分の年齢のせいだろうか。

柳は正面に顔を向けたまま、胸ポケットから出したUSBメモリをミズキに差し

出した。

「ミズキさんに歌ってほしい」

「歌、ですか……」

ミズキは受け取ろうとはしなかった。ハンドルを切るため、その手を一度引っ込める。

「体調が悪いことは知っているよ。今すぐじゃなくきちんと回復してからでかまわないし、スケジュールやプロモーションだってミズキさんの体調に合わせていいと思っっている。それにこれはバラードで、以前のように激しく体を使うこともない。しっとり静かに口ずさむような曲だ」

柳がジェリーフィッシュを知ったのは、マネージャーが「すごいバンドが出てきた」と興奮した様子でCDを聞かせてきたからだだった。最初はどうせ若いだけの一発屋だろうと思っただが、聞いてみると繊細な声が耳に心地よく、気づけばその日のうちにオークションに出されていたインディーズ時代の手作りCDまですべて手に入るよう整えていた。それらはどの曲も素晴らしいの一言だった。とにかくミズキの声がいい。よく伸びるハイトーン。裏声と地声に境がなく、サビに向かってなめらかに声が上がっていく。聞けば聞くほどその声の虜になった。この子は確実に今後も業界に残り続ける。まだ若いがすでに変声期は終えているし、喉さえ痛めなければガクンと崩れることはないだろう……と、そう確信していた。

聞けば聞くほどのめり込み、次第にCDでは満足できなくなり、事務所に無理を言っただけのライブのチケットも手に入れてもらった。実際に行ってみると、好きなのはあくまで声だったのに、歌っている姿を見たらその外見にも魅了された。普段から気に入った若手のライブに赴くことがないわけではなかったが、それだって目を閉じて音に耳を澄ますばかりだった。なのにこのときはどうしても我慢ならず、とてもかわいらしい笑顔のプロマイドを買っていた。その一枚は今も、自宅に併設された個人スタジオの一角にしまっている。

「君のために作ったんだ。いや、俺のためかな」

「え？」

「俺の作った曲をどうしてもミズキさんに歌ってほしくて。君の声でこの歌を聞きたかったんだ」

柳の曲提供を求めるアイドルや歌手はとて多い。しかし自分の気に入った人のもので、しかもメロディがぼんと浮かんできた場合にしか仕事は受けない。その噂をおそらく大ファンだと言っていたミズキも知っただろうと思っただけが――。

「すみません……」

「もう業界には戻れそうにない？」

返事はなかった。次の信号を曲がればもうミズキの指定した場所に着いてしまう。

「……返事は今すぐじゃなくていい。まずはその曲を聞いてみてほしい。それから

どうするかを考えてほしい」

信号が赤に変わること願ったが、無情にもそれはきれいな青色を放っていた。

「……すみません」

ミズキがもう一度同じ言葉を言った。もう視界には停まるべきコンビニが見えて  
いる。このまま通り過ぎたい衝動に駆られながら、柳はウインカーを出してハンド  
ルを切った。

サイドブレーキを引き、ミズキを見る。もう一度USBメモリを差し出してみて  
も手を伸ばされなかったので、ミズキのシャツの胸ポケットに落とした。

「まずは聞いてみてくれ」

「僕は……もう歌えませんが」

思いもよらない言葉に、柳は目の前が真っ暗になったような気がした。

~~~~~

「ペニスが硬くなってきたよ。最後の射精をしたいのかな」

「最後……」

その言葉に、体が震えた。

「ああ、語弊があったね。海月くんは淫乱だから、陰囊を鞭で打たれても射精がで  
きるんだった。ということは……やっぱりペニスを失っても不便はないね」

「っ……」

「普通はペニスを失うと射精ができなくて苦しくなるけど、海月くんには他に射精  
する方法があるんだから」

「でもっ……!!」

ペニスを包んでこすってする射精と、他の場所に痛みを与えてもらうこととする  
射精はまったく違う。それにこのところずっとペニスをこすってもらえばかりだ  
ったから、もうペニスへの刺激がないと満足できない体になってしまっている気が  
して怖かった。

~~~~~

ペニスをいじられている感覚がある。でも痛みは微塵もない——それがなんだか  
不思議だった。

「崇行さん」

「ん？」

「手術……してるんですよね？」

柳がドレープの奥を覗いた。

「してるよ。触られてる感覚もないか」

「それは何となくあるんですけど……実感が湧かないっていうか」

これで今、本当に大事なところを取られているのだろうか。

「痛みがまったくないならよかったよ。でもちゃんと進んでるから大丈夫だ」

「はい」

健康なペニスの切除が進んでいることを「大丈夫」と表現する違和感。まだ心のどこかで、これはすべてドッキリのようなもので、擬似的にペニスを失う恐怖心を楽しませようとしているだけじゃないか、なんて――。

だから「終わりましたよ」と言われてもただペニスの感覚がなくなっているだけで、そこにはちゃんとペニスがあつて、時間が経てば感覚もちゃんと戻ってきてこれまでと何一つ変わらない状態になって――そういうプレイじゃないかという思いがあつた。

柳と繋いだ手に力を込め、視線を柳の目から唇に移す。それだけで柳は海月の想いを汲み取り唇をこすり合わせるキスをくれた。

「これからはオムツになるな」

「え……」

「今の尿道の位置だとトイレでの排泄はできないだろう」

「でもオムツなんて……」

「管を入れて立ちションする？」

「あ……」

頭に浮かんだ光景に胸が高鳴った。だって本当だったらペニスがあるはずなのに、そこにあるのは細い管だけで……快感も何もなくただ管を持ち、排尿が終わるのを待つだけなんて。

「どうやらオムツよりそちらの方がよさそうだね」

「あつ……」

足がもじもじと動きそうになった。けれど下半身は一切感覚がないので、実際には足の指一本動かすことはできない。

「すごくいやらしいだろうな。それに排泄の度にペニスがないことを意識することになる」

「恥ずかしい……」

陰囊はあるのにペニスがない。排尿は無機物を通して行うだけ――どうにもいやらしくてたまらない気持ちになった。

「柳さん」

話が終わるのを待っていたのか、医師が柳に声をかけた。「そろそろ最後の――」

「ああ、はい」柳が頷く。

「あ……」

本当にペニスが体から離れるのか。やはりまったく実感は湧かない。

「海月くん。俺が海月くんのちんぽを切るからね」

「は、はい……」

もう手術が始まってから大分経つ。それなのにまるで今から始まるかのように緊張した。

「海月くん、おちんちんが取れるところ見ようか」

「え……」

医師の提案に戸惑っていると、隣にいた別の医師が手術台の真上にアーム付きの鏡を運んできた。グロテスクなのは苦手なのに、なぜかそこから目を離せない。海月の顔を写した鏡が徐々に傾きを変え――

「あ……」

思っていたほどのグロテスクさはなかった。血も拭き取ってくれたのかおぞましさがない。しかし陰囊のすぐ上に見慣れたものはなく、代わりにハサミのようなものがいくつか置かれているのが見えた。

「これが海月くんのおちんちんだよ」

見えるかな、と言いながら医師が近くにあった肉を指した。

「ほら、ここでまだくつついてる。ここを今から柳さんに切ってもらおうね。そしてたらもうおちんちんは完全に体から離れるから」

手術は、本当に行われていた。なんだか信じられない。

「海月くん、大丈夫？」

柳に頭を撫でられ、はっとして意識を戻す。

「すみません、感覚がまったくないから……本当に手術が進んでいると思ってなくて」

「そう……じゃあ改めてちんぽにさよならしようか」

「はい。崇行さん……崇行さんが……僕の大事なちんぽを取って」

自分の声が震えていた。恐怖と後悔と不安と……一瞬でも気を緩めたら頭がおかしくなってしまうそうだった。

「うん。俺が取るよ。ちんぽがない海月くんも愛してる」

「っ……」

涙がポロポロと落ちて言葉が出なくなった。目をぎゅつとつぶって何度も強く頷き、それから鏡の中に視線を戻す。医師から説明を聞いた柳が、ハサミを陰囊の根元にあてた。

「海月くん」

「はい……」

あとがき含む15万6千字あります。長いですが、ずっとSMです。溺愛ハピエンです！  
よろしく願いいたします！

gooneone (3)ーわんわん)

ジャック！ サンプル

2021/ 11/ 27

✉ : gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

📱 : gooneone

